命がけのボディーガード4人組

依頼人の元ヤクザとの間に生まれた
不思議な絆(きずな)! 男たちの追い求めた
夢とサスペンス

KADOKAWA NOVELS 今月の新刊 カドカワノベルズ 定価680円

KADOKAWA NOVELS

息ひそめ、闇に羽撃け

勝目 梓

カドカワノベルズ

昭和六十三年十月二十五日初版発行

著　者　勝目梓
発行者　角川春樹

息ひそめ、闇に羽撃け

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三
〒一〇二　電話　営業〇三-八一七-八五二一　振替東京三-一九五二〇八
編集〇三-八一七-八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-770608-6　C0293

目次

一章　二人　9
二章　素性　44
三章　工作　83
四章　醜聞　142
五章　捨て身　184

一章　二人

1

体が大きいわけではない。
風丰が特に精悍だというのでもない。
言動は静かだ。
それでいて、人に何かの力のようなものを感じさせる男が、たまにいるものだ。
相原徹がそうだった。
初対面の相原徹を一目見て、私は鋼を連想した。
そのとき私はまだ、相原の素性も経歴も知らなかった。知らないままに、この男は普通の人間の知らない世界の風に触れたことがあるにちがいない、と私は思った。
私の印象は当っていた。そうとわかるまでにはかなり時間を要したのだが——。
相原徹が依頼人として、それもボディーガードを依頼するために、私の前に現われたのだと知って、私は少し戸惑った。自分を守るのに、人の力を借りるような相手には見えなかったからだ。
月曜日の朝だった。朝といっても十一時近くだった。私は事務所と住まいを兼ねているマンションの三階の部屋の窓から、外を眺めていた。
私は起きて間がなかった。立ったままコーヒーを飲んでいた。朝食はソフトボイルドの卵一箇ときまっている。卵も立ったまま、流し台の前で食べた。
忙しかったわけではない。私はひまだった。五月も半ばになるというのに、その月になってから私を働かせてくれる依頼人は、一人もいなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

窓の外に何かすばらしいものが見えていたわけではない。私がコーヒーマグを手にして眺めていたのは、高田馬場駅を発着する山手線の電車だった。私のいるマンションは、高田馬場駅の裏手にあるのだ。

私はコーヒーを飲みながら、ぼんやりしていた。考えていたことといったら、半月も仕事にあぶれていても、コーヒーと卵だけの朝食にはありつける自分の暮しは、恵まれているというべきか、そうではないのか、といったようなことだった。

ノックはなかった。ドアチャイムも鳴らなかった。私は気配でふり向いた。男と女が入ってくるところだった。

その男が相原徹だった。四十三、四歳に見えた。麻のグレイのスーツに、モスグリーンのネクタイをきちんとしめていた。スーツの胸ポケットに、メタルフレームのサングラスを入れていた。

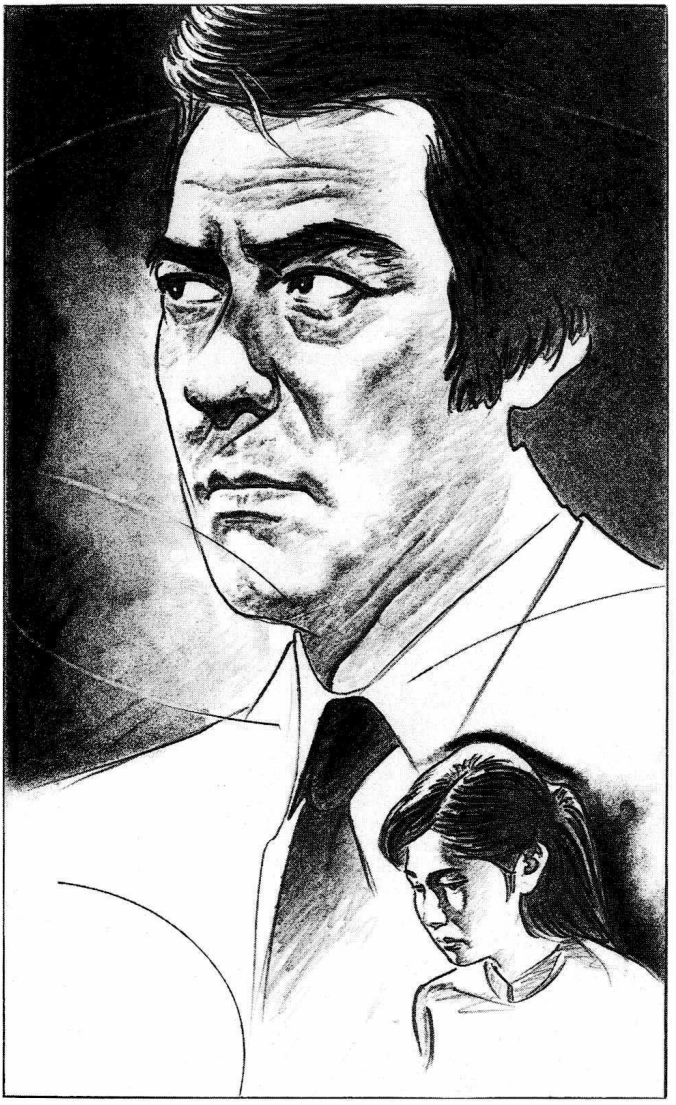
わずかにウェーブのある長めの髪は、きちんとまとめられていた。眉は太くて濃かったが、いかつい感じではなかった。ネクタイのグリーンがもう少し鮮やかで、サングラスをかけたら、きわどいところでキザな男に見えたかもしれない。

女は三十半ばに見えた。着ているものは安物ではなさそうだった。ベージュの半袖のワンピースに、幅の広い白のベルトをしていた。丸顔で鼻の小さい、平凡な顔立ちの女だった。だが、世帯じみたところはなかった。

相原の印象が鋼を連想させたりしたせいか、私の眼には女は影が薄く見えた。事実、女は相原の陰に入るようにして、うしろからそっと私の事務所に入ってきたのだ。女が見すぼらしい身なりでもしていたら、二人はずいぶん不釣合いなカップルに見えたかもしれない。

「矢田さんですか？」

男が言った。低いけれどもよくひびく声だった。



「矢田信一郎です」
「お願いしたいことがあって、やってきたんです」
私は二人にソファをすすめた。依頼人は女のほうであって、男はいわば介添役として付いてきたのだろう、と私は考えていた。
ポットにはいれたばかりのコーヒーが入っていた。私はそれを二人に出した。名刺も出した。相原は名刺を出さなかった。かわりに名乗った。
「こっちは戸沢英子です」
名乗ったあとで、相原は女のほうにちょっと顔を向けてそう言った。呼びすての口調がごく自然だった。私は二人の関係を想像してみたが、見当はつかなかった。
「で、どういうご依頼ですか？」
「ボディーガードをお願いしたいんです」
「ボディーガードですか……。困りましたね。ぼくは調査が専門なんです。ボディーガードはやらないんですよ」
「わかってます。ボディーガードがこちらの営業種目にないことは承知してます。営業種目に掲げてはいらっしゃらないが、そういう仕事を前になさったことがあるということも、わたしは知ってるんですよ」
私は黙っていた。相原が言っているのが、私のしたどの仕事のことをさしているのか、もちろんわかっていた。
「あれはちょうど一年ほど前だったですかねえ。光洋物産の来島重幸氏のボディーガードをつとめられたのは……」
「来島さんのお知合いですか？　相原さんは……」
「そうじゃありません。わたしは来島氏のお知合いの、ある企業の社長から話を聞いたんです。世間話でした。日本の企業人もたいへんになってきた、個人でボディーガードを雇わなきゃならないようなこ

とが起きてんだから、とその社長は言ったんです。矢田さんは以前は警視庁に奉職なさってて、要人警護のお仕事をなさってたそうですね」

「ずいぶん昔の話なんです、それは……」

「来島さんも矢田さんのそういうご経験を見込んで、あなたにボディーガードを依頼されたんだそうですね」

「ええ、まあ……」

光洋物産の重役の来島重幸という人物の警護の仕事に、私が同業者たちとチームを組んで当ったことは、ある意味では広く世間に知られている話だった。

ある事情から来島重幸が私に警護を依頼してきて、その仕事をつづけるうちに、私たちは与党の幹事長が殺されるという、政治家のスキャンダラスな事件に巻きこまれて、結果的にその事件を暴くことになったのだ。

その事件の経緯を報道する中で、私たちのした仕事がマスコミによって伝えられた。だが、その後で私のところにボディーガードの依頼がひきつづき舞い込むというようなことはまるでなかった。そのためもあったし、ボディーガードの仕事は来島重幸のときで懲りていたので、私は二度と引き受ける気はなくなっていたのだ。

「ぜひ、お願いしたいんです、矢田さん」

「お話を伺う前に言うのもなんですが、そういう仕事には自信がなくなりましてねえ」

「何をおっしゃいますか。失礼ですが、報酬のほうは充分に考えさせていただきます。ほんとうにわたしどもを助けると思って、ひとつ力を貸していただきたいんです」

「わたしたちとおっしゃるのは、相原さんと戸沢さんのお二人のことなんですか？」

「そうなんです。ちょっと厄介な事情になってましてね。危機にさらされているのは、私と英子の体だ

けじゃないんです」
「それはどういうことですか？」
「わたしども二人の人生がかかっているんですよ、このことには。キザったらしい科白と思われるでしょうが、事実なんです」
相原のことばは、私の興味をくすぐった。二人が夫婦でないことは、姓がちがうことではっきりしている。兄妹にしては顔立ちに似たところは見られない。そして相原は『二人の人生がかかっている』と言ったのだ。
目の前にいる二人の中年の男女が生きている人生というものに、私は興味というよりも好奇心を抱いた。あるいは私は、巧みにこちらの気を惹くような相原の話法に、うまく誘いこまれたのかもしれない。依頼人なり、その事件なりに、人間的な興味を抱いてしまうと、たいていの仕事は引き受けてしまうという困った癖が、私にはあるのだ。
結局、私は相原の持ちこんできた仕事を引き受ける気持になった。半分は金のためだった。私は半月もの間、仕事にあぶれていたのだ。しかし残りの半分は、相原徹という男に対する興味と、彼の言う『二人の人生』に対する好奇心からだった。
「わかりました。やれるだけのことはやってみましょう」
「ありがとうございます。助かりました。無理をお願いしたということは、よくよくわきまえたつもりです」
「お話を聞かせてください」
「無理なお願いをしておいて、今度は勝手を言うようで心苦しいんですがね、矢田さん。事情は一切訊かない、わたしどもの身の安全だけを守ってくださる、そういうわけにいきませんか」
相原徹は、正面から私に眼を据えて言った。ことばつきは丁重で、声も静かだった。だが、相原の身

に備わっている何かの力のようなものが、ひときわ鮮明になったのが、そのときだった。黙って言うとおりにしろ――私はそういうふうに言われた気がした。私はいささかムッとしたが、笑顔を作った。

「お気持はわかります、相原さん。来島重幸氏も、言い方はちがっていましたが、同じ主旨のことを最初におっしゃったんです。そりゃね、誰かに命を狙われてるとなったら、普通の人間なら私なんかのところには来ずに、まっ先に警察に行きますよ」

「おっしゃるとおりです。わたしどももそうしたい。だが、できない事情があるから、金を遣って矢田さんのお力をお借りしなきゃならないんです」

「話せないような事情なんですか？」

「そんなことはありません。推測でよければ話せるんです。だが、推測で物を言うのはわたしは嫌いでしてね」

「つまり、ご自分が危険にさらされている事情が、相原さんにも推測でしかわからないということですか？」

「そうなんです。ただ、思い当ることが二つほどはあるんです。それ以上のことはわたしにもわからないんです」

「知ろうとはお思いにならない？」

「もちろん調べるつもりです」

「そっちのほうも手伝いますよ。何も事情がわからないで、身辺だけガードするというのじゃ、仕事がうまくいかないんですよ。事情をつかみ、相原さんたちお二人の敵の正体をつかまないことには、警護の方策も立てられませんからね」

「事情はまだ推測の域を出ていないんですが、敵の正体はわかってるんです。どこかのやくざ者たちなんです」

「暴力団員ですか？」

「おそらく、いや、まちがいありません」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

「相原さんはお仕事は何をなさってるんですか？」
「いまは無職です。転身を考えているところでしてね」
「これまでは？」
「いろいろです。レストラン、小さな金融会社、運送業、風俗営業、ホテル。いろんなものに手を出しました」
「暴力団との関わりは何かあったんですか？　お仕事の上で……」
「多少はありましたがね」
「相原さんが推測なさってることのアウトラインだけでも話していただけませんか？」
「もったいぶってるとお思いにならないでいただきたいんですが、また、脅しのように聞こえるかもしれませんが、わたしの推測が当っているとすれば、矢田さんは何もお知りにならないままでいらしたほうが、ご迷惑がかからずにすむと思うんですよ」
「それを知ると、迷惑が私に及ぶおそれがあるんですか？」
「それも大きな迷惑がね」
「ボディーガードだけに専念していれば、迷惑はかからないということですか？」
「少なくとも大きな迷惑は免れるはずです」
「なるほどね」
「勝手な話だと思われるでしょうけど、わたしは隠しごとをしようとして、こういうことを言ってるわけじゃないんです。それはひとつ信じてください」
「信じましょう。ただ、こういうことはどうなんでしょう。大きな迷惑のかかることを承知で、私たちが勝手にその事情を調べるというのは。それは相原さんご迷惑ですか？」
「そんなことはありません。わたしはただ、矢田さんと、仕事を一緒にしてくださる矢田さんのお仲間に、不必要な迷惑がかかることを心配しているだけ

なんです。もっとも、ボディーガードとしてわたしと一緒に動いていただくことになるわけですから、あるいは自然にその事情は矢田さんたちにも見えてくるかもしれないんですがね」

相原はそう言った。私は相原が隠しごとをしようとしているのではない、ということを信ずる気持になっていた。

話が終るまで、戸沢英子は一言もしゃべらなかった。彼女は終始、眼を伏せて、両手を膝の上に置き、ソファの上で背すじを伸ばしたまま、置物のようにそこに坐っていた。けれども、じっと動かずにいる戸沢英子は、緊張、不安、沈鬱、悲壮、そして相原とは異なる何かの静かな力のようなものを、明らかに漂わせていた。

「なにぶんにもよろしくお願いいたします。無理をきいてくださって、ほんとうにありがたく思っています」

帰るときに、戸沢英子は私の顔を正面から見てそう言った。それがそのときはじめて私が聞いた彼女のことばだった。

2

相原徹と戸沢英子を送り出してから、私は電話を三本かけた。

小倉知也。秋津慎平。池中忠司。三人とも私と同業の私立探偵で、光洋物産の来島重幸のボディーガードの仕事を一緒にやった連中だ。

小倉とは私は刑事時代からの仲間だ。小倉の紹介で私は秋津と池中と知り合い、来島重幸の仕事をした。三人とも四十男だ。

秋津は最初の妻に恋愛沙汰を起された末に自殺され、二度目の妻とは離婚して、今はピンクキャバレーのホステスをしている女と、半同棲のような生活

をしている。京子というその女は、秋津に言わせると、並みより少し頭がよすぎるのか、悪すぎるのか判断に苦しむところのある、しかし心のきれいな、とてつもなくセックスの好きな女らしい。私は本人に会ったことがないから、どういう女なのかはわからない。

池中も妻子と別居して、自分の娘ほども年のちがう、印刷会社でタイプを叩いている女と暮している。

来島重幸の事件で、私ははじめて秋津や池中と知り合って、一緒に仕事をしたのだが、プライベートな話を突っ込んでしたことはない。だから、二人が妻子と別れたのは女房運がわるいためなのか、彼らが女癖がわるいせいなのか、私にはなんとも言えない。

私にも離婚歴がある。私の場合は女房運がわるかった。それは断言できる。私の刑事時代に、私の女房だった冴子は他の男を好きになり、結局その男と再婚した。再婚の相手が小倉知也だ。私は相原徹と戸沢英子の身辺を守る仕事を、私の女房を寝取った男としなければならないのだ。人生にはそういう巡り合わせもある。私は気にしてはいない。過ぎたことだ。

私はチームを組もうと思っている三人に電話をした。秋津も池中も仕事をほしがっていた。詳しい話を聞かないうちに、二人は承知の返事をした。

小倉は事務所にいなかった。仕事を抱えているのではなかった。ひまをもて余して、近くのパチンコ屋に行っていた。電話には冴子が出た。

「ボディーガードの仕事なの？」

冴子の声は笑っていた。

「何がおかしいんだ？」

「思い出さない？」

「何をだ？」

「光洋物産の来島って役員のボディーガードを、あ

なたたちが引き受けてきたときのこと」
「わざわざ思い出す必要なんかないよ。あの仕事のことは何から何まで全部覚えてる。はじめてのボディーガード業だったからな」
「じゃあ、あの事件であたしが外波山組っていう暴力団の連中に誘拐されたことも覚えてるわね」
「何を言いたいんだ？」
「あのときあなたも外波山組の連中につかまって、あたしが監禁されてる場所に連れてこられたのよね」
　私は返事をしなかった。冴子が何を言おうとしているのか、見当がついてきたからだった。
「あのとき、外波山組の連中は、あたしとあなたにセックスさせようとしたじゃない」
「してほしかったかね？　あのとき」
「ばか……。でもあのとき、あたし裸にさせられたわ。あなた、離婚してから初めてだったわけよね、あたしのヌード見るのは……」
「あの事件の中で、おれが忘れてしまってたのは、そのことだけだ」
「嘘だわ。あのときあなたは感激した顔をしてたわ」
「ばかたれ。別れた女房の裸見て感激するばかがどこにいる」
「この電話のつながってる先にいるわ。あなた、あのときのあたしのヌードのすばらしさが忘れられずに、またボディーガードの仕事を引き受けたんでしょう？　ああいうありがたいことが、また起きるんじゃないかって思って」
　冴子は自分の冗談がよほど気に入ったと見えて、受話器に笑い声をひびかせた。冴子という女には、ごくわずかな美点と、かぞえきれないほどのいやな面がある。ことあるごとに、別れた夫の気を惹くようなことを言ってみたり、自分が捨てた夫がいつま

でも未練を持ちつづけていると、勝手に思いこんでいるところは、彼女の数あるいやな面の中でも、特記すべきいやなところである。美点は冴子がチャーミングな女だということだけだ。

「これからそっちに行く」

「間もなくうちの人帰ってきちゃうわよ」

「いい加減にしろ。あんたに用があって行くんじゃない。用があるのは人の女房を盗んだ男のほうだ。三時に秋津も池中もそっちに行くことになってるんだ。小倉が帰ってきたら仕事が入ったって言っとけ」

私は言って、電話を切った。受話器には最後まで、私をからかってよろこんでいる冴子の笑い声がひびいていた。

私は近くの洋食屋でハヤシライスの昼食をすませた。マンションの駐車場から車を出して、中野駅の近くの小倉の事務所に行った。小倉もマンションの一室を、事務所と冴子との住まいの兼用で使っている。女房を盗んだ男と、よろこんで盗まれていった元女房が暮しているところに行くのは、仕事のためとはいえ、心が躍るというぐあいにはいかない。

私の車はポンコツ同然の白のブルーバードである。廃車になった車の山の中を探せば、私の車よりもずっとまだ程度のいい車が、いくらでも見つかるはずだ。請け合ってもいい。仕事がなかったために、しばらく乗らずにいたブルーバードの車内は、かびと古い油のまじりあったような匂いがこもっていた。私は全部の窓を開け放って走った。老朽化したエンジンの音がうるさかった。

小倉は事務所に帰ってきていた。秋津も来ていた。私より二十分ほど遅れて、池中が来た。池中は疲れきったような、ひどい顔をしていた。眼が充血していて、脂の浮いた顔が黒ずんで見えた。

「どうしたんだ？　体の具合がわるいんじゃないの

か？」
私は池中に訊いた。
「体は元気さ。年相応にはね。ゆうべ寝てないんだよ、全然……」
「ひまだって言ってたじゃないか」
「仕事はひまだった。忙しいのは女のことだけ。裕子ともめちまってね、ゆうべ」
「あんたが浮気でもしたんだろう」
秋津が茶化した。裕子というのは、池中が一緒に暮している愛人の名前だった。
「浮気でもしようものなら、裕子は自殺するか、おれを殺すかするだろうよ」
「聞いた？　あなた。あなたもあたしとのこと、池中さんぐらいに堂々とのろけてほしいわ、人の前で……」
冴子がニヤニヤして言った。
「のろけなもんですか、奥さん。ぼくはもううんざりだな。いやね、ゆうべ女房が電話よこしたんだよ。娘の高校進学のことで。それが裕子ともめた原因さ。裕子は女房が用があって電話をよこすたびに、一時的に人格が変っちまうんでね」
「たいへんだな、あんたも。おれは一人だから気楽でいいや」
「問題は女の選び方だよ、池中さん。女は無口で、自分は頭がわるいということをよくわきまえてて、こっちがしたいときにいやな顔をせずに着てる物脱いで、こっちがしたくないときは自分も絶対にその気にならないというのが最高だね。その点、京子は理想的だよ」
「あたしが進歩的な思想を持ってる女だったら、いまの秋津さんの発言は聞き逃せないわね」
「そろそろ仕事の話をしようじゃないか。世間の男たちは働いてる時間だよ」
小倉がみんなのばか話に終止符を打った。四人の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb